

原 著

受験ストレス環境に対して予備校生が行う 積極的意味づけ過程に関する検討

羽鳥 健司*・湯浅 俊夫**・小玉 正博***

The process of meaning to failure of university entrance examination among preparatory school students in Japan

Kenji Hadori*, Toshio Yuasa**, Masahiro Kodama***

Abstract

One of the theoretical constructions of the adjustment process following negative life events was meaning. In this longitudinal study of preparatory school students in Japan who has failed university entrance examination once or twice, the purpose of this study was to investigate empirically the process of Meaning to adverse incidents that was failure of university entrance examination. We adopt two constructions which were considered to be contained the process of Meaning. One was Positive Acceptance of Adversity (PAA) which represents cognitive coping to only extremely stressful incidents and the other was one kind of growth perceptions which represents positive outcomes reported by persons who have experienced extremely negative events. Results of ANOVA showed that PAA was used more in early stage than late stage after failure of university entrance examination. Growth perception was felt more in early stage and late stage than middle stage after failure of university entrance examination. Results of path analysis indicated that PAA was positively associated with growth perception. Issues related to the process of Meaning were discussed.

キーワード：意味づけ (meaning), 積極的困難受容 (positive acceptance of adversity), 予備校生 (preparatory school students), (Key words) 意味づけ過程 (process of meaning), 困難経験後の成長知覚 (posttraumatic growth)

I. 問題と目的

現在わが国では、大学受験に失敗して再度受験を意図している、いわゆる「大学浪人者」は108,000名以上存在する。(大学入試センター, 2008; 文部科学省, 2006)。少子化が進み、かつてのような熾烈な受験競争は少なくなったとはいえ、大学受験の失敗というネガティブなライフィイベン

トは、彼らにとって非常にストレスフルな経験であることは容易に想像できる。

予備校生に限らず非常にストレスフルな経験は、個人に心理学的な悪影響を及ぼすことが多くの研究で示されている。しかしその一方で、困難な出来事は必ずしも悪影響だけを及ぼすのではなく、人にポジティブな変化をもたらすことも報告されている(例えは、Affleck & Tennen, 1996; Tedeschi &

* 筑波大学人間総合科学研究科、現・東京成徳大学応用心理学部

** 東京成徳大学子ども学部

*** 筑波大学心理学系

受稿2008.6.19 受理2008.8.25

Calhoun, 1996)。このような現象は meaning (以下、意味づけと訳す) の文脈で捉えられており、個人が、極めてストレスフルで困難な出来事に対して意味づけを行うことで心理学的な適応が上がることが実証的に示されている (例えば、Bellizzi, & Blank, 2006; Francis & Pennebaker, 1992)。

災害被災者や慢性疾患罹患者などのように、即座の統制が不可能な強いストレスを個人が継続的に受けている場合、臨床心理学的に原因を取り除こうとするよりも、その状況下で個人がどのように機能できるかというアプローチを行うことでその個人の全人的な援助ができると考えられる。意味づけはこのような困難な状況下で、個人が持っている機能を十全に発揮できるよう援助を行うための学問分野である。

予備校生は、即座の統制が不可能かつ非常にストレスフルな社会的環境におかれていると考えられるので、意味づけの文脈による検討により彼らを効果的にサポートする方法につながる示唆が得られると考えられる。しかしながら国を含めて意味づけに関する実証的な研究はあまり行われていないのが現状である。したがって意味づけに関する実証的な知見を積み重ねることは意義のあることであると考えられる。

1990年代になって、これまで行われてきた意味づけに関する実証的な研究を詳細に検討した結果、2種類に分類されることが示された (Affleck & Tennen, 1996; Janoff-Bulman & Frantz, 1997)。2種類に分類されることを初めて実証的に示したのは Davis, Nolen-Hoeksema, & Larson (1998) である。彼らは意味づけの1つの型を Making Sense とした。これは困難な出来事の原因を特定、説明できるようになることを通して、その出来事を自分なりに理解した状態を指す (Janoff-Bulman & Frantz, 1997)。もう一つは Finding Benefit である。Finding Benefit は、個人が極めてストレスフルな出来事の重要性や精神的な価値を理解しようと試

みることを表す (Janoff-Bulman & Frantz, 1997)。Finding Benefit は困難な出来事経験後の調節過程全般を表しており、この調節過程には少なくともストレスコーピングの一種である肯定的再評価 (positive reappraisal) と困難経験後に自分に起こったポジティブな変化を知覚することの2種類が含まれていると考えられている (Tennen & Affleck, 2005)。

困難な出来事を経験した直後のみに焦点をあてている Making Sense に分類される意味づけに関する概念に対して、その後の調節過程全般を表している Finding Benefit に分類される意味づけに関する概念は、すでに詳細に構成されて実証的な検討が行われているものがあり、様々な困難な出来事に対してこの種の意味づけを行うと精神的健康が上昇することが実証的に示されている。その中で近年注目されている概念の1つに Posttraumatic Growth (以下、PTG とする) がある。PTG とは、困難な出来事を経験した後に知覚する自己のポジティブな変化である (Tedeschi & Calhoun, 1996)。PTG 尺度はすでに尺度が開発されていて、様々な検討が行われている。例えば HIV 感染者に対して PTG 尺度を用いて抑うつ、CD4¹⁾との関連を検討した結果、PTG 尺度得点が高いほど抑うつの程度は低く、CD4 の値が高いことを示している (Milam, 2004; Milam, 2006)。PTG の他にも、困難な出来事を経験した後の個人の主観的な成長を表す、 Stress-Related Growth (Park, Cohen, & Murch, 1996) や、 Benefit Finding (Antoni, Lehman, Klibourn, Boyers, Culver, Alferi, Yount, McGregor, Arena, Harris, Price, & Carver, 2001) などが提唱されており、心理学的な適応との関連が報告されている。

しかし PTG 型成長知覚²⁾は、困難な出来事を経験した後の心理学的適応と好ましい関連がないという報告も存在する。Tomich & Helgeson (2004) は、乳がんに罹患している女性患者を対象として

検討を行った結果、PTG型成長知覚はネガティブ感情に正の影響を、QOLに負の影響を与えたことを報告している。他にもPTG型成長知覚と心理学的適応には有意な関連がないと報告している研究が存在する (Antoni et al., 2001; Widows, Jacobsen, Booth-Jones, & Fields, 2005)。

PTG型成長知覚と心理学的な適応との関係に一貫した結果が得られないことについて、様々な議論が行われている。中でも重要な議論の一つに、PTG型成長知覚はいつ行われるのかという問題がある。Carver & Antoni (2004) は乳がん患者を対象として縦断研究を行い、手術3ヶ月後のPTG型成長知覚は5年後および8年後のQOLを上昇させ抑うつ症状を減少させるように予測するが、直後のPTG型成長知覚は予測しないことを実証的に示した。またLechner, Carver, Antoni, Weaver, & Phillips (2006) は、乳がん患者を対象とした研究の結果を再分析して詳細に検討した。その結果、手術後すぐのPTG型成長知覚は、手術直後の心理学的適応とほとんど関連していなかったが、5年後のPTG型成長知覚は5年後よりも多くの適応を表す諸変数と関連していることを実証的に示した。このように、困難な出来事を経験した後のPTG型成長知覚が機能するには、一定の期間をあけた後に行われる必要があると考えられる。

行われたPTG型成長知覚が機能するまでに一定の期間が必要であると考えられる点を説明する上で有用な視点として、以下の指摘を挙げることができる。Janoff-Bulman (2006) によると、人は困難な出来事を経験するとその出来事を繰り返し吟味する (cognitive processing)。繰り返される吟味は、極めてストレスフルな出来を受け入れるために行っているのである程度の長い時間行われていると考えられている (Janoff-Bulman, 2006)。更にこの繰り返される吟味がPTG型成長知覚を促進させることが指摘されている (Bower, Kemeny, Taylor, & Fahey, 1998)。したがってPTG

型成長知覚が機能するのは、困難な出来事を経験してからある程度の時間が経過してからであると考えられる。

またこの繰り返し行われる吟味の一部として認知的ストレスコーピングが含まれていることが指摘されている (Janoff-Bulman, 2006)。ここで即座の統制が不可能な強いストレスを受けると、人は認知的ストレス対処の中の肯定的再評価を行うことが指摘されている (Folkman & Moskowitz, 2000)。したがって、困難な出来事に対して行われる認知的再評価は、PTG型成長知覚を促進する可能性を指摘できる。もし、このことが実証的に示せたとすると、Tennen & Affleck (2005) が示す Finding Benefit の意味づけ過程の一部を実証的に示すことになる。しかし筆者らの知る限り、少なくともわが国においてこのような意味づけの過程を検討した縦断的研究はほとんど見当たらぬ。したがって予備校生を始めとする強いストレスを受け続けている個人が意味づけを行う過程を明らかにすることは意義があると考えられる。

ところで困難な出来事に対して行われる認知的再評価を表す概念として、羽鳥・小玉 (2006) は、「積極的困難受容 (Positive Acceptance of Adversity, 以下PAAとする)」^③を提唱した。PAAはネガティブと判断されていた出来事を再評価し、ポジティブ面とネガティブ面の両面が含まれていると認知することと定義されている。彼らは、人が大きな困難を乗り越えようとしているときにその体験によって信念が変容する (Elliott, Kurylo, & Rivera, 2002) とされる意味づけを正確に記述するために、心理療法の事例記録の終結期の部分から、定義に合致する箇所を抜き出し、因子分析を行うことでPAA尺度を作成した。PAAは極めてストレスフルな出来事に対して行われる認知的再評価であるので、PTG型成長知覚を促進すると考えられる。

PAAの比較対象として、神村・海老原・佐藤・

戸ヶ崎・坂野（1995）の肯定的解釈を用いた。肯定的解釈は、情動焦点型の認知的対処法略である（神村他, 1995）。PAAと肯定的解釈は、認知的な対処法略の一種であるという点で共通しているが、意味づけという極めてストレスフルな出来事に対してのみ行われるPAAに対して、肯定的解釈は意味づけ以外の日常的なストレッサーについても行われるストレスコーピングであるという点において異なると考えられる。

以上より本研究における目的は、PAAはPTG型成長知覚を促進するという仮説を検討することである。

II. 方 法

1. 調査対象者と調査時期

5月（2006年5月中旬）：神奈川県内の大手予備校1校の本科コースに在籍する予備校生900名に対して調査を実施した。参加に同意した対象者のうち、記入漏れ、記入ミスを除いた190名^④（男性128名、女性62名）を分析対象とした。回収率は21.1%であった。対象者の年齢は18歳から22歳、平均年齢は18.27歳、標準偏差は0.59であった。

9月（2006年9月上旬）：5月の対象者190名のうち、調査に応じ、かつ記入漏れや記入ミスがなかった有効回答者120名（男性75名、女性45名）を分析対象とした。回収率は63.2%であった。対象者の年齢は18歳から22歳、平均年齢は18.54歳、標準偏差は0.58であった。

12月（2006年12月上旬）：9月の対象者120名のうち、調査に応じ、かつ記入漏れや記入ミスがなかった有効回答者98名（男性63名、女性35名）を分析対象とした。回収率は81.2%であった。対象者の年齢は18歳から22歳、平均年齢は18.98歳、標準偏差は0.51であった。

2. 調査手続き

調査は、被調査者が所属する進学コース単位で、集団個別記入方式で実施された。予備校の事務室内に回収箱を設置し、留め置き法で行われた。各進学コースの担任に調査を委託したため、正確な実施が可能となるように具体的な方法や注意事項を作成し、文書で手渡した。3回の調査はいずれも個別記入形式の質問紙で、朝のホームルームの時間に配布された。なお調査時期の選定に関しては、実質的に予備校の授業が開始される5月上旬、中間地点として夏休み終了直後の9月上旬、本格的な受験シーズンが始まる大学入試センター試験が行われる1ヶ月前の12月上旬を調査時期として設定した。

3. 質問紙

(1) PTG型成長知覚：PTG型成長知覚の程度を検討するために、Davis et al. (1998)に基づいて以下の1項目でFBの程度をたずねた。教示文は、「人は挫折をすることで、その経験から何かを獲得することができます。あなたはこれまでの予備校生としての生活を通して、何か得た物事がありますか？ 1～6の中からもっともあてはまる数字を1つ選んで、○をつけてください。」であった（1項目・6件法）。

(2) PAA：羽鳥・小玉（2006）が作成したPAA尺度を用いた。成功した臨床事例の中から意味づけの定義に当てはまる箇所を抜き出しました。教示文は、「あなたは今現在の予備校生としての生活について、以下のように考えが思い浮かびますか？ それぞれの項目について5段階（1：全く思い浮かばない～5：常に思い浮かぶ）から、最もあてはまると思うものを1つ選んで○をつけてください」と教示した。尺度を構成している項目は、“困難があるから、私は生きていく上で何か大切

なことを知ることができると思う”、“苦しめば苦しんだだけ、その分いいことが起こると思う”、“困難な経験こそが、これから自分に生かさせていくと思う”などを含んだ7項目である（5件法）。

- (3) **肯定的解釈**：神村他（1995）が作成した“TAC-24”を用いた。ただし、分析には下位尺度の一つである肯定的解釈のみ使用した。情動焦点型対処法略の一種である。「（予備校生生活に伴う）精神的なつらさを乗り越えるために、あなたは普段から、どのように考え、どのように行動していますか。各文章に対して、自分がどの程度あてはまるか評定してください」と教示した（3項目・5件法）。

III. 結 果

以下の分析ではまず、予備的に各変数の記述統計量およびPAA尺度の分析を行う。次に、意味づけが行われる過程に関する検討を行うにあたってその前段階として、各変数の時系列分析および横断面分析を行う。最後に意味づけが行われる過程について分析を行う。

1. 各時期におけるPAA、PTG型成長知覚、肯定的解釈の平均値と標準偏差

Table 1 各時期のPAA、PTG型意味づけ、肯定的解釈の平均と標準偏差

	5月	9月	12月
PAA	27.11 (5.89)	25.73 (6.34)	25.30 (6.17)
PTG型意味づけ	4.21 (1.07)	3.02 (1.04)	4.05 (1.23)
肯定的解釈	10.95 (2.95)	9.00 (4.15)	12.45 (2.95)

（ ）内はSD

各時期におけるPAA、PTG型成長知覚、肯定的解釈の平均値と標準偏差を算出した（Table 1）。

2. PAA尺度の信頼性係数および因子分析

各月ごとにCronbachの α 係数を算出したところ、5月は.80、9月は.87、12月は.82であった。次に各月ごとに最尤法、プロマックス回転で因子分析を行った。各月の固有値の変化は5月は3.30、1.32、0.68の順に、9月は3.98、0.79、0.74の順に、12月は3.54、1.11、0.93の順に変化していくので1因子構造と判断した。各月の各項目の因子負荷量は、5月は0.39から0.80の間、9月は0.55から0.86の間、12月は0.37から0.93の間の値であった。各月の累積寄与率は、5月は40.0%、9月は56.9%、12月は44.4%であった。

3. 行われたPAA、PTG型成長知覚、

肯定的解釈それぞれの各時期間の比較

PAA、PTG型成長知覚、肯定的解釈のそれぞれが行われた量が、時期間で差があるかどうかを検討するために各時期を独立変数、PAA、PTG型成長知覚、肯定的解釈を従属変数として被験者内計画の1要因分散分析を行った（Figure 1～3）。その結果、全ての従属変数で有意差が示された（順に、 $F(2, 194) = 4.00, p < .05$; $F(2, 194) = 42.81, p < .01$; $F(2, 194) = 22.17$ ）。そこで多重比較

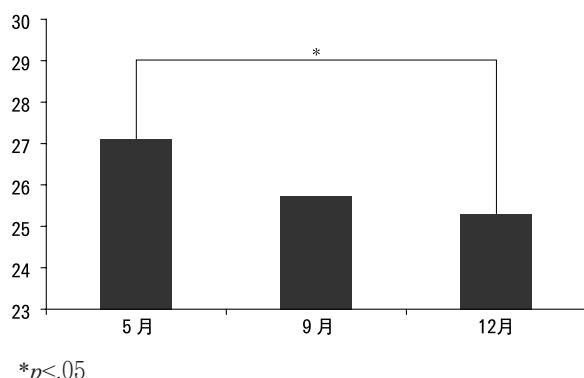


Figure 1 各時期を独立変数、積極的困難受容を従属変数とした1要因分散分析

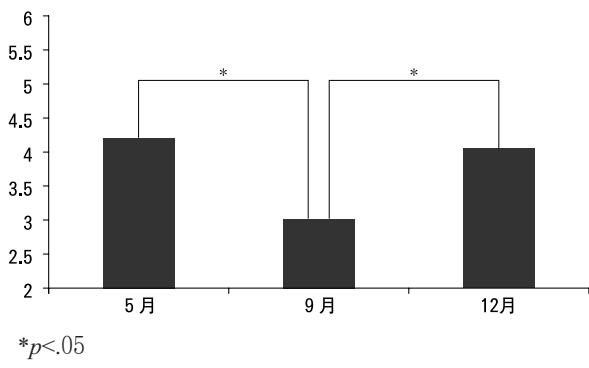


Figure 2 各時期を独立変数、PTG型成長知覚を従属変数とした1要因分散分析

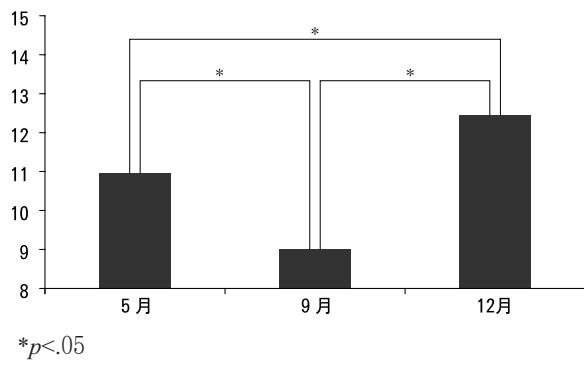


Figure 3 各時期を独立変数、肯定的解釈を従属変数とした1要因分散分析

(Bonferroni 法)を行った。その結果PAAは、5月に12月よりも多く行われていることが示された ($p<.05$)。5月と9月および9月と12月の間に有意な差は認められなかった。PTG型成長知覚は、5月と12月に9月よりも多く行われていることが示された ($p<.05$)。5月と12月の間に有意な差は認められなかった。肯定的解釈は、12月に5月と9月よりも多く行われていることが示された ($p<.05$)。また5月に9月よりも多く行われていることが示された ($p<.05$)。

4. 各時期におけるPAA、PTG型成長知覚、肯定的解釈を行った人数の比較

各時期においてPAA、PTG型成長知覚、肯定的解釈を多く行った人数を比較するために、PAA、PTG型成長知覚、肯定的解釈それぞれの合計点の理論的な平均値よりも得点が高い被調査者の人数をその時点でそれぞれの意味づけやストレスコーピングを多く行った人数とみなして、 χ^2 検定を行った。その結果5月、9月、12月全ての時期において、PAA、PTG型成長知覚、肯定的解釈を多く行った人数に有意差は認められなかった(順に、 $\chi^2(2)=0.84$, n.s.; $\chi^2(2)=3.22$, n.s.; $\chi^2(2)=1.87$, n.s.)。

5. PAAと肯定的解釈がPTG型成長知覚に与える影響について

PAAがPTG型成長知覚を促進しているかどうかを検討するため、5月および9月におけるPAA、PTG型成長知覚、肯定的解釈を説明変数とし、9月におけるPAA、PTG型成長知覚、肯定的解釈、および12月におけるPTG型成長知覚目的変数としてパス解析を行った(Figure4)。なお、各説明変数の純粋な成分が各目的変数に与える影響を検討するために、5月および9月では全ての変数を投入し、統制した上でパス解析を行った。その結果、各適合度指標は $\chi^2/df=1.441$ 、 $GFI=.958$ 、 $AGFI=.888$ 、 $CFI=.946$ 、 $RMSEA=.068$ と許容できる範囲の値であった。5月におけるPAAは9月におけるPAAとPTG型成長知覚に正の影響を与えていた(それぞれ $\beta=.43$, $p<.01$; $\beta=.36$, $p<.01$)。5月におけるPTG型成長知覚は12月におけるPTG型成長知覚に正の影響を与えていた($\beta=.37$, $p<.01$)。9月におけるPAAは12月におけるPTG型成長知覚に正の影響を与えていた($\beta=.29$, $p<.01$)。9月におけるPTG型成長知覚は12月におけるPTG型成長知覚に正の影響を与えていた($\beta=.27$, $p<.01$)。その他の各説明変数は、各目的変数に有意な影響を与えてなかった。以上より、PAAがPTG型成長知覚を促進す

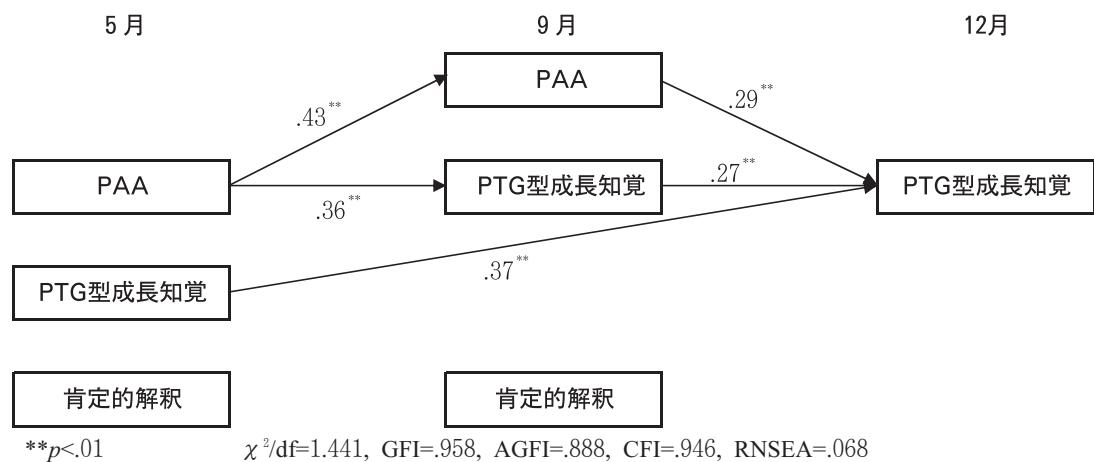


Figure 4 PAAがPTG型成長知覚に与える影響

ることが示された。

IV. 考 察

本研究では予備校生の反応を通して、困難な出来事に対して行われる意味づけの過程を検討した。そのための予備的な検討として各変数の記述統計量、PAA尺度の因子分析を行い、さらに各変数の時系列分析および横断面分析を行った。

PAA尺度の因子分析の結果について

PAA尺度の信頼性係数を算出した結果、いずれの月でも十分に高い値が得られた。よってPAA尺度は内的一貫性の高い尺度であるといえる。また因子分析の結果からは、極めてストレスフルな出来事に対して行われる認知的再評価を表すPAAという構成概念を測定するに足りる尺度であることが示された。

各変数の時系列分析および横断面分析の結果について

各変数における時期間の比較の検討からは、5月のPAAは12月のPAAよりも有意に高いことが示された。この結果は、5月は12月よりも多くの困難な出来事に対する肯定的再評価が行われてい

ることを示していると考えられる。したがって、予備校生は新しい年度が始まって比較的早い段階において大学受験の失敗の経験に伴う挫折感等の認知的再評価を行っていると考えられる。

また5月と12月のPTG型成長知覚は9月のPTG型成長知覚よりも有意に高いことが示された。この結果は予備校生が大学受験の失敗というストレスフルな出来事を経験したすぐ後と一定以上の期間が過ぎた後に何か利益となるものを獲得できたと知覚することが多かったことを示していると考えられる。

また12月は5月と9月よりも、5月は9月よりも多くの肯定的解釈を行っていることが示された。この結果は予備校生が行う日常的なストレッサーに対する認知的再評価は、12月、5月、9月の順で多く行われていることを示していると考えられる。

次に、各時期における各変数間の比較では、どの月においても他の変数と比べて有意に多くまたは少なく使われている変数はないと解釈できる結果であった。

PAAがPTG型成長知覚に与える影響について

5月および9月におけるPAA、PTG型成長知覚、肯定的解釈を説明変数とし、9月におけるPAA、

PTG型成長知覚、肯定的解釈、および12月におけるPTG型成長知覚を目的変数としてパス解析を行った結果、5月のPAAは9月のPTG型成長知覚に有意な正の影響を与えていた。同様に、9月のPAAは12月のPTG型成長知覚に正の影響を与えていた。この結果は、困難な出来事に対して行われる認知的再評価がPTG型成長知覚を促進していることを示している。よって仮説は支持されたといえる。これまでPTG型成長知覚を中心に、Finding Benefitに分類できると考えられる意味づけに関する概念を用いた実証的な研究は数多くおこなわれている。しかし本研究は、これまでほとんど行われてこなかった意味づけの過程を実証的に検討した点において意義があると考えられる。

PAAはPTG型成長知覚を促進したが、肯定的解釈はPTG型成長知覚に有意な影響を与えてなかった。これは、極めてストレスフルな出来事に対して行われる肯定的再評価は繰り返される吟味の一部であることを示しているものと解釈できる。それに対して肯定的解釈が表す肯定的再評価は、極めて強いストレッサーではなく日常的なストレッサーに対して行われる認知的再評価であることを示していると考えられ、したがって困難な出来事に対して行われる認知的再評価を含んでいると考えらる繰り返される吟味とは無関係であると解釈できるだろう。

困難な出来事を繰り返し吟味することがPTG型成長知覚を促進すると解釈できる結果から、予備校生の意味づけ過程は大学受験の失敗の経験に伴う後悔等を繰り返し吟味して、最終的に失敗経験から自分にとって何かプラスになるものを発見するというものになると考えられる。

したがって、時系列分析と合わせて本研究の知見を基に予備校生の意味づけをヒューマン・ケア心理学的にサポートするとしたら、強いストレッサーをもたらす出来事に対して認知的再評価を多

く行う新年度の初めの段階でこのことを行いやすくするような環境を作り、後のPTG型成長知覚をできるようにすることが一つの方法として挙げられるであろう。

分析から得た仮説以外の結果の解釈について

仮説を検討するために行った分析では仮説を支持する結果以外に、5月のPAAが9月のPAAを促進し、5月のPTG型成長知覚が12月のPTG型成長知覚を促進するという結果を得た。この結果は、困難な出来事に対する認知的再評価やPTG型成長知覚が、その後の認知的再評価やPTG型成長知覚を促進していることを表していると考えられる。

まとめと今後の課題

本研究では、予備校生の反応を通して困難な出来事に対して意味づけが行われる過程を検討した。その結果、極めてストレスフルな出来事に対して行われる認知的再評価がPTG型成長知覚を促進することが示された。これまでほとんど行われていなかった困難な出来事に対して行われる意味づけの過程を実証的に検討した点において本研究には一定の意義があると考えられる。しかし本研究には、以下に挙げるような今後検討すべき課題が残されている。

第1に、PTG型成長知覚の測定方法である。本研究ではPTG型成長知覚を1項目のみで測定した。これは、日本ではPTG型成長知覚についての尺度が存在しなかったため、Davis, et al. (1998)などの先行研究に基づいて用いた測定法であった。今後、尺度を作成し、信頼性、妥当性等を検討することで、概念をより的確に捉えることができるだろう。

第2に、PTG型成長知覚の時系列分析の結果からは、5月と12月に9月よりも多くPTG型成長知覚が行われていることが示された。12月が

9月よりも多く行われるのは、困難な状況下に置かれてからある程度の時間が経過しているので、困難な出来事に対して行われる肯定的再評価に促進されているものと解釈できる。しかし9月に比べて5月が多く行われるのは本研究の結果からはわからない。困難経験後すぐに行われるPTG型成長知覚と時間が経過してから行われるPTG型成長知覚には質的な違いがあるのかどうか検討する必要があるだろう。

第3に、予備校生以外の対象者でも検討する必要があるだろう。本研究の結果は予備校生の反応であって、不治の病や慢性疾患に罹患している者、犯罪被害者、災害の被災者など、他の困難な状況下にいる者に対してまで一般化することはできない。今後は、それぞれの対象者の意味づけの過程を検討することが望まれる。

以上の今後の課題が残されているにも関わらず、本研究には一定の意義があると考えられる。本研究では、現在実際に困難な状況下にいる予備校生を対象に縦断的な検討を行った。その意味で、本研究はわが国ではこれまでほとんど行われてなかった意味づけを実証的に検討し、定量的に測定するための足がかりを作ったといえる。

付 記

本研究の実施にあたり、ご協力くださいました予備校生の皆様、職員の皆様に心から感謝申し上げます。

本研究は、日本心理学会第71回大会での発表を加筆・修正したものである。

注

- 1) ヘルパーT細胞の測定値を表す。値が低いほど、免疫系が大きな損害を受けていることを意味する。
- 2) PTG尺度を用いずに、困難経験後に自分に何かポジティブな変化が起こったと知覚したことを問う

場合、1項目で「人は挫折をすることで、その経験から何かを獲得することができます。あなたはこれまでの予備校生としての生活を通して、何か得た物事がありますか?」(“Sometimes people who lose a loved one find some positive aspect in the experience. For example, some people feel they learn something about themselves or others. Have you found anything positive in this experience?”)と問う研究が多い(e.g., Davis, Nolen-Hoeksema, & Larson, 1998; Affleck, Tennen, Croog, & Levine, 1987; Affleck, Tennen, & Rowe, 1991; Thompson, 1985)。これ以降、本研究ではPTGも含めて、このような研究における成長知覚を「PTG型成長知覚」と呼ぶこととする。

- 3) 引用元の羽鳥・小玉(2006)では積極的困難受容という用語はなく、代わりに「肯定的意味づけ」という用語が用いられている。しかし彼らは、羽鳥・小玉(2006)以降、「肯定的意味づけ」を積極的困難受容と名称を変更している。名称以外の変更点は全くないため、本研究では積極的困難受容という用語を使用した。
- 4) 大学受験の失敗という経験以外の意味づけに関係するような要因を極力抑えるために、浪人経験年数が2年以下と判断できる年齢の被調査者のみを分析対象とした。ただし、配布した質問紙の最後の部分で、もし感想やメッセージ等がある場合は自由に記述するよう求めたところ、大学を中退した後の受験が2回目であると判断できる記述をした22歳の被調査者も分析対象に加えた。

引用文献

- Affleck, G., & Tennen, H. 1996 Constructing benefits from adversity: Adaptational significance and dispositional underpinnings. *Journal of Personality*, 64, 899-922.
- Antoni, M. H., Lehman, J. M., Klibourn, K. M., Boyers, A. E., Culver, J. L., Alferi, S. M., Yount, S. E., McGregor, B. A., Arena, P. L., Harris, S. D., Price, A. A., & Carver, C. S. 2001 Cognitive-behavioral stress management intervention decreases the prevalence of depression and enhances benefit finding among women under treatment

- for early-stage breast cancer. *Health Psychology*, 20, 20-32.
- Bellizzi, K. M. & Blank, T. O. 2006 Understanding the dynamics of post-traumatic growth in breast cancer survivors. *Health Psychology*, 25, 47-56.
- Bower, J. E., Kemeny, M. E., Taylor, S. E., & Fahey, J. L. 1998 Cognitive processing, discovery of meaning, CD4 decline, and AIDS-related mortality among bereaved HIV-seropositive men. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 66, 979-986.
- Carver, C. S., & Antoni, M. H. 2004 Finding benefit in breast cancer during the year after diagnosis predicts better adjustment 5 to 8 years after diagnosis. *Health Psychology*, 23, 595-598.
- 大学入試センター 2008 平成20年度センター試験の志願者数（確定）について. 〈http://www.dnc.ac.jp/center_exam/20exam/shigankaku1.html〉 (2008年6月10日).
- Davis, C. G., Nolen-Hoelser, S., & Larson, J. 1998 Making Sense of Loss and Benefiting from the experience: Two Construals of Meaning. *Journal of Personality and Social Psychology*, 75, 561-574.
- Elliot, T. R., Kurylo, M., & Rivera, P. 2002 Positive growth following acquired physical disability. In C. R. Snyder, & L. J. Shane (Eds.), *Handbook of Positive Psychology* (pp.687-699). London: Oxford University Press.
- Folkman, S., & Moskowitz, J. 2000 Positive affect and the other side of coping. *American Psychologist*, 55, 647-654.
- Francis, M. E.,& Pennebaker, J. W. 1992 Putting stress into words: The impact of writing on physiological, absentee, and self-reported emotional well-being measures. *American Journal of Health Promotion*, 6, 280-287.
- 羽鳥健司・小玉正博 2006 困難事態に対する肯定的意味づけと主観的well-beingとの関連 日本心理学会第70回大会発表論文集, 31
- Janoff-Bulman, R. 2006 Schema-change perspectives on posttraumatic growth. In L. G. Calhoun & R. G. Tedeschi (Eds.), *Handbook of posttraumatic growth* (pp.81-99). New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.
- Janoff-Bulman, R., & Frantz, C. M. 1997 The impact of trauma on meaning: From meaningless world to meaningful life. In M. Power & C. Brewin (Eds.), *The transformation of meaning in psychological therapies* (pp.91-106). London: Wiley.
- 神村栄一・海老原由香・佐藤健二・戸ヶ崎泰子・坂野雄二 (1995). 対処法略の三次元モデルの検討と新しい尺度 (TAC-24) の作成 教育相談研究, 33, 41-47.
- Lechner, S. C., Carver, C. S., Antoni, M. H., Weaver, K. E., & Phillips, K. M. 2006 Curvilinear associations between benefit finding and psychosocial adjustment to breast cancer. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 74, 828-840.
- Milam, J. E. 2004 Posttraumatic growth among HIV/AIDS patients. *Journal of Applied Social Psychology*, 34, 2353-2376.
- Milam, J. 2006 Posttraumatic growth and HIV disease progression. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 74, 817-827.
- 文部科学省 2006 学校基本調査237進離別卒業者数(3-1). 〈http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/08010901/003/238.xls〉 (2008年6月10日).
- Park, C. L., Cohen, L., & Murch, R. 1996 Assessment and prediction of stress-related growth. *Journal of Personality*, 64, 645-658.
- Tedeschi, R. G., & Calhoun, L. G. 1996 The posttraumatic growth inventory: Measuring the positive legacy of trauma. *Journal of Traumatic Stress*, 9, 455-471.
- Tennen, H. & Affleck, G. 2005 Benefit-finding and benefit-reminding. In C. R. Snyder, & L. J. Shane (Eds.), *Handbook of Positive Psychology*. London: Oxford University Press. Pp.584-597.
- Tomich, P. L., & Helgeson, V. S. 2004 Is finding something good in the bad always good? Benefit finding among women with breast cancer. *Health Psychology*, 23, 16-23.
- Widows, M. R., Jacobsen, P. B., Booth-Jones, M., & Fields, K. K. 2005 Predictors of posttraumatic growth following bone marrow transplantation for cancer. *Health Psychology*, 24, 266-273.